

八日目の蝉（1）

「蝉は7年土の中にいて、外に出て7日目に死んでしまうという。一生が余りにも短いので、蝉は可哀想な感じもするけれど、でも、周りの仲間が皆7日目に死ぬのなら、みんな同じだから別に悲しくないかと思う。むしろ、もしも7日目で死ぬと決まっているのに死ななかった蝉がいたら、自分だけ生き残ってしまったらその方が悲しい気がする。」

他人とは違う人生を生きなければならなくなったとき、人はどう感じるのでしょうか。喜びというより戸惑いの方が大きいかも知れません。自ら望んだことでなければ、自分に対する苛立ちや悲しみ、憤りというものを感ずるのではとも思います。

「八日目の蝉」は、既にテレビドラマ化されていますのでご承知の方も多かろうと思います。角田光世さんの小説ですが、この作品中では、大きく二つの世界が描かれています。一つは、愛人の子どもを誘拐した野々宮希和子という女と彼女が薫（本名は秋山恵理子）と名付けた女の子との4年に及ぶ逃避行です。

もう一つの世界は、実の両親の元に戻り、大学生に成長した秋山恵理子が愛人との間に子どもを宿し、その愛人とも別れて一人で子どもを産もうと決心し、立ち上がる物語です。

この作品は、母性をテーマにしたサスペンスといわれるだけあって、吸い込まれるように一気に読んでしまいました。

そして、読んでいて感じたことは、逃避行のはらはらした面白さというよりも、親子とは何か、家族とは何なのかという大変重いテーマが横たわっているということでした。

幼児誘拐は勿論犯罪であることを承知しながら、野々宮希和子の思いを遂げさせてやりたいという気持ちが、心の片隅をよぎります。

彼女は、営利を目的に赤ん坊を誘拐したのではありません。彼女を見た赤ん坊が笑った、その瞬間に彼女の母性にスイッチが入ったのだと思います。

育ての親という言葉がありますが、彼女の場合は、どこまで逃げても育ての親になれるはずありませんが、でも、もしかしたら、彼女は逃げ通せたら「母」になれると思っていたのかもしれませんが。月日が経つうちに、ますます二人の絆は深くなる。誰が見ても実の母子に見える。そこが悲しいですね。（続く）

（塾頭 吉田 洋一）